

年  組  番 名前

**教材 7-B-(1)の解答 近代・現代の外交の様子**

次の（ア）～（ツ）の説明はどの時代のものであるかを、【表】の中の①～⑤から選び、番号で答えなさい。

**【表】**

明治 (1868～1912)		大正 (1912～1926)		昭和 (1926～1989)		平成 1989～	
①明治維新 立憲国家 (1868～1890)	②日清・日露戦 争 近代産業 (1891～1913)	③第一次世界大 戦と日本 大正デモクラシー (1914～1928)	④世界恐慌 第二次世界大 戦と日本 (1929～1945)	⑤現代の日本と 世界 (1945～)			

**【外交の様子】**

- (ア) 朝鮮に対し開国を求める交渉を進め、江華島事件をきっかけに、不平等な内容の日朝修好条規を結んだ。
- (イ) 日本は日英同盟を理由に参戦し、ドイツが持っていた中国の山東省の権益をベルサイユ条約によって戦後引きつぎ、太平洋地域の植民地の委任統治権を得た。
- (ウ) 講和条約で清は、①朝鮮の独立を認め、②遼東半島、台湾、澎湖諸島を日本にゆずりわたし、③賠償金2億両を支払うことが決められた。
- (エ) 外務卿（大臣）の井上馨は、鹿鳴館で舞踏会を開くなど欧化政策を取り、条約改正をめざした。
- (オ) 日本は、日本の指導のもと、欧米の植民地支配を打破し、アジアの諸民族だけで繁栄しようという「大東亜共栄圏」の建設を唱えた。
- (カ) 日本は中国に対して、ドイツが持つ山東省の権益の継承、旅順・大連の租借期間の延長をはじめとする満州での権益の拡大などを求めた。
- (キ) 岩倉具視使節団が2年間にわたり、欧米の進んだ政治や産業、社会の状況を直接的に体験し、不平等条約の改正も進めようとしたが不成功に終わった。
- (ク) 国際連盟はリットンを団長とする調査団を満州に派遣して調査をし、その後の総会で満州国を認めず、日本軍の満鉄沿線への撤兵を求める勧告を採択した。
- (ケ) 日本はフランス領インドシナの北部に軍を進め、次いで日独伊三国軍事同盟を結んだ。また翌年には日ソ中立条約を結び、北方の安全を確保した。
- (コ) 日ソ共同宣言が調印されて、ソ連との国交が回復し、日本は国際連合に加盟し、

国際社会に復帰した。

- (サ) ロシアと樺太・千島交換条約を結び、ロシアに樺太の領有を認め、千島列島のすべてを日本領にすることで両国の国境を確定した。
- (シ) 日本に対してアメリカは石油の輸出禁止にふみきり、イギリスやオランダもこれに同調した。
- (ス) 日本は韓国を併合し、朝鮮総督府を設置して武力を背景とした植民地政策をおし進めた。
- (セ) サンフランシスコで講和会議が開かれ、日本は資本主義陣営など48か国と講和条約を結んだ。さらに日米安全保障条約を結び、米軍の駐留を認めた。
- (ソ) 満州を中国から分離することを主張していた現地の日本の軍部（関東軍）は、奉天郊外の柳条湖で満鉄の線路を爆破し、それを機に軍事行動を始めた。
- (タ) 義和団事件後もロシアは大軍を満州にとどめて事実上占領し、さらに韓国への進出を強めたため、日本はイギリスと日英同盟を結びロシアに対抗した。
- (チ) イギリス船ノルマントン号の事件で、イギリス領事裁判所は船長に軽いばつをあたえただけだったため、日本国内で不平等条約改正を求める世論が高まった。
- (ツ) 日本本土はアメリカ軍を主力とする連合国軍によって占領され、GHQの指示に従って日本政府が政策を実施する、間接統治が行われた。

(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)
①	②	②	①	④

(カ)	(キ)	(ク)	(ケ)	(コ)
③	①	④	④	⑤

(サ)	(シ)	(ス)	(セ)	(ソ)
①	④	②	⑤	④

(タ)	(チ)	(ツ)
②	①	⑤

それぞれの説明文を、教材7-F-(1)の表にあてはめて記入してみよう。外交の変化を、時代の流れの中でまとめることができます。